



園だより

12月号

令和3年11月26日
駿河台大学第一幼稚園
園長 田所 恒子

身体を思う存分動かす中で

緊急事態宣言が解除され2ヶ月近くが経ちます。公園での飲食も認められ、弁当持参の園外保育（遠足）が可能になりました。長時間に渡って思う存分遊ぶことができ、子どもたちは大喜びです。少しずつコロナ以前の生活が戻ってきて、身体を思う存分動かし、自然に触れながら感じ、体験して学ぶ教育ができることを嬉しく思います。

11月には、年少児は「武蔵野の森公園」、年中児は「神代植物公園自由広場」、年長児は「かに山」へ園外保育に出かけました。これらは起伏に富んだ地形の公園で、子どもたちにとっては見上げるばかりの丘や傾斜地があるという共通点があります。先生が遊びのモデルとなるように一緒に遊んだり、楽しさを共感したり、安全に配慮したりする中で、子どもたちは友達と繰り返し登ったり、下りたりして身体を思う存分動かし楽しんでいました。満足感と自信に満ちた笑顔が見られ、「今までの遠足で一番楽しかった!」「また行きたい」と言う嬉しい声が、どの園外保育でも聞かれました。

中でも「かに山」の傾斜地は“崖”のように険しく、最初は、躊躇する子どももいましたが、楽しそうな先生や友達の姿に刺激を受け「やってみよう!」と全員が挑戦していきました。土の部分が滑り、途中で動けなくなる子どももいました。友達に手を引いてもらったり、登り方を教えてもらったりして登り切った喜びはとても大きく、嬉しそうでしたが、今度は下らなくてはなりません。ここにもまた試練があり、苦戦しました。その様子に1回でやめてしまうのではと思ったのですが、違いました。きっと保護者の方と一緒にあったなら、「怖い」と泣いて助けを求めたり、「もう嫌だ」と諦めてしまったりしたことでしょう。友達と声を掛け合い、繰り返し“崖登り”を楽しんでいました。次第に身体の動かし方を身につけて上手に上り下りが出来るようになったり、新たな経路を見つけたりと遊び方を広げ深めながら、泥だらけになって楽しんでいました。「楽しい」という気持ちは、子どもたちに大きな力を育みます。運動面の育ちに加え、友達と一緒に遊びを進める力や、積極的に取り組もうとする意欲、周りの状況を的確に判断する力、身を守り安全に行動する力などを身につけて遊ぶ姿に、幼稚園教育の意義を感じ嬉しくなりました。

本園では今年度、研究主題を『進んで身体を動かすことを楽しむ幼児を育てる - 「やってみよう!」とする気持ちがつながる環境構成 -』として園内研究を進めています。先日の園内研究の協議会では、子どもたちが様々な動きを楽しめるように、遊戯室の遊具をサーキット状に並べて、環境を工夫した事例が協議されました。中でも、高く積んだ巧技台をよじ登る姿に注目し、子どもたちの身体の動かし方や楽しみ方、巧技台の高さや設置の仕方などを、それぞれの担当が自身の実践を語りながら協議していました。子どもたちの一番の環境は、身近な担任です。担任たちは、積極的に園内研究の協議会に参加し、子どもたちが「やってみよう!」と身体を動かす環境構成を探っていました。幼児期の運動は、子どもたちの健康な身体や体力・運動能力だけでなく、意欲や対人関係など心の育ちにも大きく影響を与えます。さらに、怪我や事故などから身を守る力も育てます。本園では、これからも子どもたちが「やってみよう!」「楽しい」と感じながら、思う存分身体を動かす機会や環境を充実させてまいります。



年少児には、小さな丘が“山”に見えたことでしょう。先生と一緒に坂を登ったり転がったりしながら「できる」動きを増やし楽しんでいました。



年中児は、大きな丘を友達と一緒に駆け上がり、走り回りながら、開放感を味わい、身体を動かす心地よさや友達と共感する喜びを味わっていました。



年長児には、“崖登り”が大きな自信になり、何回も挑戦したり林の中を走り回ったりしながら、友達と一緒に遊びを見つけ、楽しんでいました。



遊戯室のサーキット遊びが充実し、身体を動かす楽しさを味わえるように環境構成の工夫を重ねています。